



住所：東京都中央区日本橋大伝馬町13-8  
メディカルプライム日本橋小伝馬町3階  
TEL: 03-3639-3110 FAX: 03-3639-3112

2020年12月 診療カレンダー

1. 内科・生活習慣病

2. 心臓病

3. 糖尿病

4. 睡眠時無呼吸症

5. 土曜日診療



今年もお世話になりました  
よいお年を



ホームページ

日	月	火	水	木	金	土
29	30	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31	1	2

休診日 午後休診 18時最終受付

一般外来	9:30-12:00	16:00-19:00
発熱外来	12:00-13:00	15:30-16:00

「今月の言葉」  
下を向いていたら、  
虹を見つけることは出来ないよ  
(チャップリン)

### <お知らせ>

- 12月29日(火) 年内最終診療日
- 1月5日(火) 2021年診療開始

### <発熱外来>

- ・時間 12:00~13:00、15:30~16:00
- ・受診の目安
  - ①37.5℃以上②咳やくしゃみ
  - ③最近の38.0℃以上の熱
  - ④インフル・新型コロナが心配の方

クリニックからのご案内、ご質問へもお答えしています

さいとう内科・循環器クリニック  
LINE公式アカウント

@237gsvtx



### ベートーヴェン 第9交響曲

クリニック通信9月号でもベートーヴェンのことを書きましたが、今回もベートーヴェンについてお話しします。我が国の年末の風物詩のひとつにあげられるほどベートーヴェンの『第九』は人気があり、多くの人々に愛されている作品です。年末にかぎらず、全国各地で『第九』の演奏会が開かれ、ときには武道館で「万人の第九」という催し物もあり、合唱で参加する方も、聴きに行く方も音楽を共有するそのひとときに胸が熱くなるのではないのでしょうか。

ところで、日本では年末に『第九』が演奏されるのは一般的ですが、クラシック音楽の本場のヨーロッパでは必ずしもそうではないようです。ただし、『第九』が特別な場面で演奏されるということはよくあることで、1998年の長野オリンピックの開会式で演奏されたり、1989年にベルリンの壁崩壊の記念演奏会で、指揮者のバースタインが東西ドイツのオーケストラ、合唱団、ソリストを集めて『第九』を演奏したことはとても有名です。そのなかでバースタインはシラーの「歓喜に寄す」の詩の「Freude(フロイデ=歓喜)」を、「Freiheit(フライハイト=自由)」に歌詞へ変更して歌わせたことは「ベルリンの壁」からの解放という歴史的意義とあわせて、大変象徴的なことでした。

さて、日本で『第九』が年末に歌われるようになったのはじまりとして一番有名なのは第二次世界大戦後の混乱期に、NHK交響楽団の前身・日本交響楽団が年末に『第九』公演を行いそれが有名になり、オーケストラの臨時収入となったという説です。もともとドイツでは大晦日に『第九』演奏会を開いていたところもあったようで、そこからヒントを得たのかもしれませんが。

『第九』はベートーヴェン作曲 交響曲第9番二短調作品125「合唱付き」が正式な名称であり、「合唱」の出番は最終(第4)楽章の20分ほどです。第1~3楽章までで50分くらいかかる曲なので、「合唱」のみを聴きに来た人にはあまりに長い前奏に途中で飽きて寝てしまう人もいられるかもしれません。しかし実はこの第1~3楽章までの曲もたいへん美しい名曲であり、是非みなさんにもじっくり聴いてほしいです。とくに第3楽章のメロディーはベートーヴェンが作曲した最も美しい旋律であり、私の大好きな楽章です。

実は『第九』は私にとっても個人的に大変思い入れのある作品です。大学3年年生の時に北大オーケストラでコンサートマスターとして定期演奏会で、当時の団の指揮者であられた川越守先生の60歳の記念も兼ねて演奏しました。団員をまとめ、合唱団やソリストとの調整など大変な苦勞もありましたが、演奏会を成し遂げた喜びはひとしおでした。川越先生のサイン入りのスコアはいまでも大切な宝物です。

『第九』に関する面白い話は沢山あります。例えば現在のCD(コンパクトディスク)はカラヤン指揮ベルリンフィルハーモニーの『第九』が1枚で収まる容量で決められたこと。ベートーヴェンの指示のテンポではプロでも演奏困難なほどメチャメチャ早いことなど。実は合唱の陰に隠れていますが、第4楽章はオーケストラの演奏もなかなか難しいのです。バスのソロの後ろで吹いているオーボエやピッコロのソロも珠玉の美しさで、オーケストラの聴きどころも満載です。

さて、ベートーヴェンは交響曲に合唱を取り入れ革命を起しましたが、その後には続く作曲家の多くは必ずしも交響曲に合唱を入れることに積極的ではありませんでした。後にメンデルスゾーンやショスタコービッチなどが交響曲に合唱を入れましたが、なんととっても有名なのはグスタフ・マーラーです。

マーラーは2番、3番、8番に大規模な合唱を入れており、とくに2番は「復活」という作品名で有名です。「復活」とはもちろんキリストの復活のことをさしますが、実は「復活」を作曲した当時、マーラーはキリスト教徒ではありませんでした(当時はユダヤ教徒でありその後カトリック教へ改宗しました)。では何故、彼が「復活」を交響曲に入れたのか？それは彼の死生観と関係があるといわれています。彼は常に死を意識して生きていましたが、「(死に)震え恐れるのはやめろ！生きるための仕度をしろ！」と全人類に向けてメッセージを送っているのです。いわば生きることへの賛歌とも言えるのです。

今、新型コロナウイルス感染症の感染防止の観点から、大声で歌うこと、大勢で歌うことはNGとされています。しかしながら、私は、音楽そして合唱ほどを人の心を動かすものはないとおもいます。ベートーヴェンの『第九』やマーラーの「復活」などの人類の宝物が一時の「コロナごとき」に負けるとは思えません。コロナの流行が去り、これらの音楽が全世界で演奏される日も遠くないと信じています。